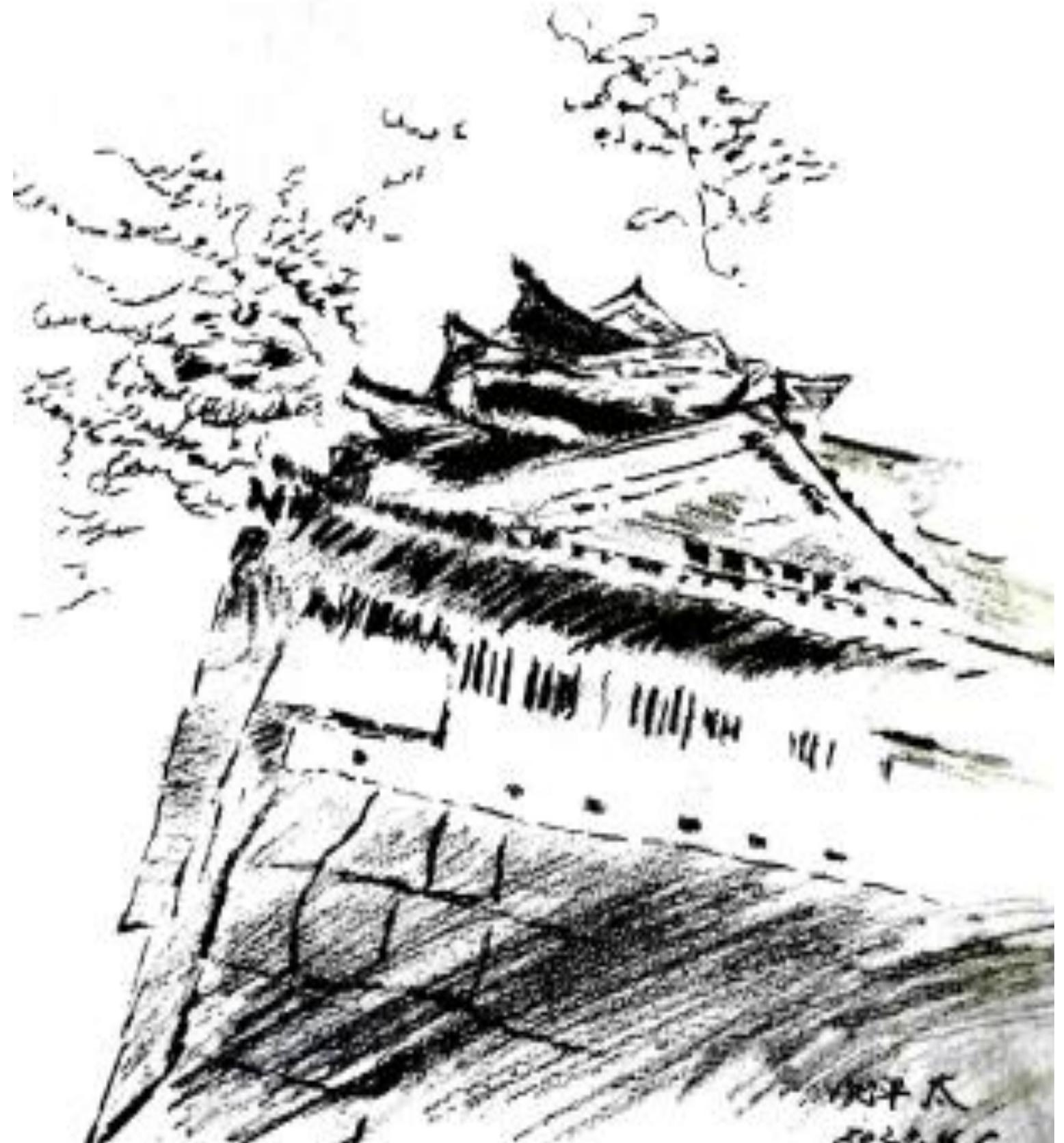


閣守天柳川

2025年8月号



第27回例会 2025年7月15日(火) 投句締切分

お題 「備蓄米」

岩原一角 選

JAは農家も客もみていない
備蓄米出遅れ恥じて顔出せず
大臣の蔵にわんさと備蓄米
米不足無策と言わず準災害
国民の腹を満たした古古古米
備蓄米ヒトとブタとを棲み分けて
喧々諤々した後顔出す備蓄米
冷蔵庫へ入れて2キロを愛おしむ
備蓄米も給付も瀬戸際対策
冷蔵庫占領してる備蓄米
流通過程不明なままの備蓄米
あの頃を思い出させる備蓄米
並ぶ人五千口抱えて皆笑顔
進次郎イメーリアップ古古古米
知らなんだ古米古古米備蓄米
備蓄米母の工夫でヒトメボレ
備蓄米と唐様で書く小泉氏
今更に米増産とは笑止なり
備蓄米旨い味付け妻の腕
古古古米持て囃されて苦笑い
備蓄米待ってましたと米穀通帳
5百億の保管費用は誰の損

真鍋心平太
佐野正邦
浜知子
三枝なな
井澤壽峰
加山勝久
小林満寿夫
信子
浜知子
松島きよみ
蔵内歳重
春田敏晴
青空
山野寿之
佐野正邦
久世高鷲
浜脇蓬生
浜脇蓬生
堀内きみ子
林ともこ
秋田あかり
蔵内歳重

(五客)

佳5 備蓄米手をつけ視野に総理席
佳4 古古古米倉庫屋一人高笑い
佳3 素麺はヒネが高いが米はダメ
佳2 事欠いてウナギを乗せる備蓄米
佳1 うろつろと探し求める備蓄米

(三才)

人 古古米と古古古古米の味比べ
地 朝のパン妻天の邪鬼米に変え
天 スーパーに備蓄米ある嫁メール
軸 この汗に米一粒の農家だが

(選評)

人の句

水加減次第でおいしく炊けるそう。私も試したが、

備蓄米はどこにもない。

地の句

笑い出してしまった。・・・しかし、令和米騒動といわれる作近、大

臣のお宅なら首が飛ぶ

天の句

見つけたよー！奥さんの嬉しそうな悲鳴が伝わってくる。生活感が漂
ういっぽうで時事吟の名句であろう。

武智三成
加山勝久
松谷由夏
小林満寿夫
東尾由子
美代
松島きよみ
武智三成
岩原一角

お題 「飛ぶ」

林ともこ 選

成功の扉へ高くジャンプする

咳くしゃみ素早くマスク敏感派

補聴器が噂大好き飛び歩く

リハーサル重ね重ねてする飛躍

暗闇を啼きながら飛ぶホトトギス

ガラガラポン飛び出す筈の青い鳥

レコードの針飛ぶような老いた母

知らぬまにダチヨウとなっていたワタシ

飛んできると言われた頃もあつたけど

花吹雪ほら僕達も無重力

風切って飛んでおじゃるぞ黒揚羽

飛翔する老いの滾りを知ってるか

(五客)

佳5 復活だジェット風船浜に舞う

佳4 あの冬の時計台から火炎瓶

佳3 さよならが飛んでるような赤とんぼ

波部珀兎

三枝なな

山野寿之

久世高鷲

蔵内歳重

秋田あかり

浜脇蓬生

平川柳

青空

春田敏晴

小林満寿夫

浜知子

三枝なな

真鍋心平太

春田敏晴

佳2 攻撃も守備もドローンの電子戦

佳1 飛びますよホップステップジャンプして

(三才)

人 邂逅のいのち飛び交う蛍の灯

地 突然のチャンス飛び込む当たりくじ

天 飛べそうな気がしてからが高い空

軸 水たまり飛んでみようか避けようか

加山勝久

美代

秋田あかり

堀内きみ子

直子

林ともこ

(選評)

人の句

ある夏の夜…

切なくて、ドラマチックな予感がするこの句、

情景も浮かび 心惹かれました。

地の句

思ってもないチャンスが訪れて、

やる気がみなぎる様子が伝わる句、

元気を貰います。

天の句

実際に、やってみようとすると、

怖さを感じるものですよね…実感句です。

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

強い者まかり通って行く世界

本棚が電子書籍にギブアップ

古希迎えやつと知つたる人の道

短冊へ臨時収入有り！と書く

脚立乗り手が離せない眩暈する

滲み出る色気場数の成すところ

肉じゃがを多めに作りお裾分け

痛感の老いは出来ないこと数多

全没に肉じゃが炊いて夫と飲む

空蟬に鳴かぬ暑さの室外機

角が取れ心は丸く頑固者

約束も無しでまた会う似た者同士

思いやるそれが優しさ引き寄せる

(五客)

佳5 優しさでぎゅうぎゅう詰めのリュック背負う 直子

佳4 こんな日は祖母の隣りで風になる 秋田あかり

佳3 愛をなぞればメビウスの輪のごとく 浜知子

佳2 紙一枚たったいちまい愛をを切る 浜知子

佳1 あの人はどうしているの天の川 林ともこ

(三才)

人 家思えば浮かんだ母今は消え 蔵内歳重

地 午前二時背中合わせの銀の月 直子

天 仙人のように白雨がやって来る 平川柳

軸 ひと玉の西瓜揺れてる網の中 真鍋心平太

(選評)

人の句

「家思えば」わずか三音で「家」の記憶・空気・人間関係すべてが立ち現われ浮かんだ母が消えていく、一連の感情の揺らぎと寂寥感に涙が出た。

地の句

小説「IQ84」の二つの月だろつか、背中合わせなのは

表と裏、現と幻、生と死、孤独と愛。

読み手にそれぞれの視点を要求する懐の深い句である。

天の句

この「白雨」は傑作と言われる歌川広重・東海道53次の『庄野 白雨(しよつのはくう)』である。

突然現れ、激しく通りすぎる白雨。その動きと存在感を、「仙人のように」と表現した作者の感性に脱帽。

お題 「激しい」

互選

1点

激しさにたじたじとなる喜寿の恋
激しい気性薪の火へと燃え移り
激務からやつと解放定年後
喜怒哀楽激しいけれど腕は良い
子の問いにたじろぐ答え大人たち
突然の雷傘も役立たず

2点

SNS正義と称しグーパンチ
雨音が激しくなつて遠くいる
激流に吸い込まれそう天の川
激しい気性咲き誇るカンナ花
相合傘二人豪雨にちりぬるを
屈辱の嗚咽の記憶ぬぐえない
気の荒いネコと和解が出来ました
有給を取りたくもなる今朝の雨
トムとジェリーいつも仲良くケンカしな
激しさを閉じ込めている石の庭
トランプの関税今日も打ち上げる
亡き父のあの鉄拳に今感謝
愛と恋激しい程に燃え尽きる
土砂降りの合間をぬつて逢いに行く
陣太鼓その激しさが背中押す
線状帯へなすすべもない暴れぶり

美代
蔵内歳重
井澤壽峰
波部珀兎
三枝なな
青空
久世高鷺
林ともこ
佐野正邦
蔵内歳重
平川柳
三枝なな
波部珀兎
浜脇蓬生
平川柳
直子
武智三成
久世高鷺
東尾由子
秋田あかり
佐野正邦
信子

3点

目を追つて絡み激しくなる舞台
盤上に激しい闘志駒光る
百歳で逢う約束の九年後
なんですぐそんな怒るのイラつくの
激論が飛び交う街の選挙戦
白糸の滝悶々として夢二恋う
ゲリラ雨上がると信じ生きている
一瞬の怒り些細なことなのに
イエスも釈迦も居ない戦場
激流の如く女の生きる道
極まつて純白になるシンフォニー

小林満寿夫
堀内きみ子
武智三成
青空
松谷由夏
小林満寿夫
直子
浜脇蓬生
真鍋心平太
浜知子
春田敏晴

4点

愚かにも激しく生きて父である
造花にも激しい恋のあとがある
引き算が激しくなつていく老後
激震に耐えて忍んだ能登の民
8点
ああ酷暑カンナは強く咲いている
12点
激流も落ち着く先は広い海
15点
生き様を激しく晒す蝉の夏

林ともこ
山野寿之
井澤壽峰
浜知子
美代
秋田あかり

6点

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。
得点が空白のものは前行の句と同得点です。

お題 「ユニーク」短句

互選

1点

変とユニーク境目どこに
人気者ですいつもユニーク
隅で無視されユニークな方
ユニークってトランプが笑う
キノコ雲だねゴジラの頭

浜脇蓬生
林ともこ
美代
秋田あかり
平川柳

2点

ユニークな親子も変わってる
いたちキユウリの最後の知らせ
サムライジャパン命名は鉄砲ユリ
アメリカよりアジアに軸を
ユニークなのは父親譲り
たまげたぞいと急いた伊予弁
ミヤクミヤク人気ユニーク可愛い
ユニークな君今は人妻

山野寿之
三枝なな
小林満寿夫
加山勝久
松谷由夏
武智三成
東尾由子
久世高鷺
浜知子

3点

本音覗かれ月と揺れるか
ユニーク貫くメンタル強し
ユニークな人希少価値かも
浴衣サンダル解らんオシヤレ
義父の六尺干すを躊躇い
ハワイ州なら月賦で買おう
ユニークな人魅力的過ぎ
よだかの星にユニークな鳥

浜脇蓬生
信子
青空
松島きよみ
加山勝久代
東尾由子
蔵内歳重

3点

個性が光る愉快な友よ
ユニークな花いつもニコニコ
マッチ棒使うレトロな珈琲店
おばあちゃんですユーチューバーの

波部珀兔
林ともこ
小林満寿夫
信子

4点

あなたといると笑いジワ増え
ユニークを観る万博巡り

波部珀兔
松谷由夏

5点

生きている人みんなユニーク
自己主張するユニークな髪

直子
堀内きみ子

7点

ユニークが闊歩す個の時代
いじめられたら白鳥になる

秋田あかり
真鍋心平太

8点

ムーンウォークで逢いに来る人
5個の眼球ゆかい万博

真鍋心平太
浜知子

9点

変わり者でも愛されている
12点 夢と聞かれて明日と答える

久世高鷺
春田敏晴

11点

今月の投句者(26名 敬称略)

春田敏晴

12点

井澤壽峰	加山勝久	蔵内歳重	春田敏晴	松島きよみ
山野寿之	岩原一角	信子	武智三成	小林満寿夫
平川柳	三枝なな	林ともこ	美代	真鍋心平太
秋田あかり	久世高鷺	直子	松谷由夏	青空
波部珀兔	浜脇蓬生	堀内きみ子		
佐野正邦	東尾由子	浜知子		

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論 「現代川柳の詩学」を考える ⑬

大正時代の剣花坊と民衆詩人ホイットマンの出会い

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳（東京川柳会主宰）

剣花坊も次の「新傾向川柳」を発表しています。

一天に雲ちる晝ひるの白い悲かなしみ

剣花坊

（井上剣花坊編『新川柳自選句百三十三人集』所収）

一九一二（明治四十五）年七月三十日、明治天皇崩御。

剣花坊は明治天皇の崩御に哀悼の意を込めて「二重橋」の

「新川柳」を発表しました。

二重橋涙のあとの草の色

剣花坊

剣花坊は大正時代に『川柳』を改題し、『大正川柳』を刊行しました。

『大正川柳』はこの時代の川柳界に君臨し、黄金時代を迎えました。「柳樽寺川柳会」の門を出でざれば、川柳家に非ず」とまでいわれました。

この『大正川柳』に参加していた川柳作家たちは「柳樽寺派」と呼ばれるようになります。

「柳樽寺派」の川柳作家たちの群像をここで紹介した

いと思います。

『大正川柳』（創刊号）を出した時、剣花坊は四十二歳でした。

● 井上剣花坊と民衆詩人ホイットマン

一九一九（大正八）年八月に剣花坊は南北社から『川柳を作る人に』という題名で川柳論集を刊行しました。

目次の「一新川柳とは何か」で剣花坊は、この本の目的について次のように語っています。

「第一に川柳の傳統を知り、その作法を知り、新川柳の名の由来する所を知り、現今の状態を知り、併せて川柳人が将来に対する覚悟を知るといふに在るのだ。要するに我川柳の過去現在未来を知らせて、川柳創作者の自覚を促す可く、自分が従来の沈黙を破つて起つた大正年代の第一声である。」

この「一新川柳とは何か」で剣花坊は「川柳の傳統」や「その作法」を語り、「新川柳」の「名の由来」などについて詳細に語っています。

「二五 世界文学と新川柳」では「世界文学」の代表者として十九世紀のフランスの自然主義文学者エミール・ゾラ（一八四〇―一九〇二）の小説と十八世紀の中頃、江戸で活躍した「前句附」の点者・柄井川柳（二七一八―七七〇）の「古川柳」とは「頗る共通したところが有る」と指摘しています。この指摘には剣花坊の比較文学者のな視点が認められます。

また「二十六 川柳一呼吸詩」で剣花坊は「新川柳は一呼吸詩である」と宣言していますが、「川柳」という短詩型文学は江戸の「古川柳」から「内在律」による「一呼吸詩」であり、大正時代に剣花坊の提唱した「新川柳」は、その「古川柳」の「内在律」の「一呼吸詩」の傳統を継承したものであるといえます。

剣花坊は「川柳」の「五七五」では「到底十分に心の表現を為すことが出来ない時、破調変格を用いるといふことは自由である」と述べ、「五七五」に「無理に纏めては、句の生命が無くなる」と述べています。

さらに剣花坊は、次のように「一呼吸詩」の「新川柳

では「詩」が最も重要であると主張します。

「新川柳は詩で無ければならぬ、対象物の中へ我心を打ち込んで其生命と共に生きるものでなければならぬ、」

続けて剣花坊は、次のように「新川柳」について述べています。

「我川柳の傳統を味はひ、やはり人間を主として取り扱はねばならぬ、（中略）貴族的ではいけない、平民的でなければならぬ、（中略）一段推し進めて、文壇の民衆詩で無ければならぬ、自由詩で無ければならぬ、而してどこまでも我國の詩であるといふことを忘れてはならぬ、」

この剣花坊の主張に「民衆詩」という言葉がありますが、大正時代には一九一八（大正七）年頃から約十年間、詩壇に「民衆詩派」と呼ばれる民衆の生活や日常用いている口語を使い、詩を書く「口語自由詩」の詩人たちがいました。

（続く）

「少子化」

真鍋心平太

日本の人口は2025年におよそ1億2500万人を数えるが、現行の出生率が続いた場合、2100年には明治維新のころとおなじ3700万人ほどに落ち込むと予測されている。人口の激減は、経済活動への影響ばかりが語られがちだが、むしろこの機会に、失われた豊かさの本質を見直すべきではないだろうか。

渡辺京二氏の名著『逝きし世の面影』には、維新の頃に日本を訪れた多くの外国人の驚きと称賛が記録されている。その驚きとは、当時の日本人の礼儀正しさ、清潔さ、慎ましさについてであり、「この国には貧しい人はいても、惨めな人はいない」と記している。列強の植民地化が進むなかで、日本は経済的には貧しくとも、共同体の連帯と倫理の中に深い人間的な豊かさを持っていたことが伺える。

「逝きし世」とは、高度成長以前、資本主義と官僚主義が席卷する前の、日本人が日常の中に穏やかな美しさと誇りを見出していた頃のことであり、人々は貧しさを恥とせず、他者との関係を大切にし、慎ましくも確かな「生活」を送っていた世のことである。

渡辺氏はこうした姿を、「夢のような現実」であったと、そこには現代が失った「人間の顔をした社会」があったのだと回想している。

戦後の日本は、驚異的なスピードで経済的發展を遂げたが、その代償として多くのものを失った。都市化による地域共同体の崩壊、画一的な教育、過労死という言葉に象徴される労働環境、そして何よりも、心の余裕と他者への思いやり。「少子化」はそれらを失った帰結のひとつであろう。私たちは「便利で豊かな生活」を手にした代りに、かつての「人間らしい暮らし」を手放してしまったのだ。

だが、人口が減るということは、同時に価値観を転換する大きなチャンスでもある。成長を前提としない社会。規模よりも質を求める暮らし。見栄や競争ではなく、調和と共感を軸にした日常。そのような未来が、「逝きし世」が私たちに遺した記憶の中にあるように思える。

「逝きし世の面影」は、ノスタルジーではない。それは、私たちが何を見失ったのかを気づかせ、何を大切にすべきかを問い直す羅針盤である。少子化という静かな激動の時代に、失われた「豊かさ」の再発見することこそが、日本再生の鍵となるに違いないと思うのだがどうだろう。

第28回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「包帯」 小林満寿夫 選
「深い」 由夏 選
「遊び」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「橋」(短句) 互 選

(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

投句開始 2025年8月9日(土) から

投句締切 2025年8月15日(金) まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

8月16日(土)～8月19日(火)

披講発表 8月20日(水) から随時閲覧可能になります。

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録

鉛筆画

今月はお休みです。

携帯 080 (2672) 4446
Tel・fax 077 (532) 4211

川柳天守閣
サンルシエル大津607号室

(事務所)
〒 520-0054
滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

(発行責任者 真鍋心平太)
(編集人 真鍋心平太)

二〇二五年七月二五日発行
ウェブ川柳天守閣会報